
思春期スイッチ。

乾 弘毅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思春期スイッチ。

【NZコード】

N8198Y

【作者名】

乾 弘毅

【あらすじ】

やたらお金のかかるバレエを辞め、これからは充実した学生生活と安定した進路を目指そうと猛勉強の末に主席で高校に入学した梶川愛。

あのときバレエを続けていたら…、なんて自分にも誰にも言わたくないから、勉強も友達も恋愛も、ぜつたいぜつたいガンバるのだ、と健気なカンジで生徒会長の伊藤和也の思春期スイッチを連打するお話です。

1. 順風満帆なようで前途多難かもしれない

入学式で新入生代表の挨拶をするという晴れ舞台から梶川愛の高校生活は始まった。

ぜひこの調子で順風満帆な3年間を送りたいと思います。

にやり。

高校生活を充実させるために部活やったほうが良いかなあ、と松村さんと話していたら、たまたま通りかかった中井さんに「新入生代表は創己会に入るんでしょ」と言われた。

ソウキカイ？ 機会部とかなんか？ とは違うよね。

「生徒会執行部。3年間ずっとではないかもしないけど、1年生の間は創己会所属のはずだよ」

知らんかった。

中井さんは3年生に創己会所属のお兄さんがいるので詳しいらしい。「でも先生にはなんにも言われてないよ」と言つたら、お兄さんに確認してくれることになった。

中井さんはよく似た雰囲気の眼鏡男子に案内されて創己会室に行くと、そこには3人の先輩がいた。

この4人以外は行事や会議があるときしか顔出さない人がほとんどらしい。

3人のひとりは入学式で在校生代表挨拶をした生徒会長の伊藤和也先輩だったのですぐ分かった。

マツチヨ系イケメンという名の壁、と記憶したので忘れるることはないでしょ。

あとの女子ふたりはまだ覚えられない。
名前は覚えた。

どつちかが副会長の三井香奈先輩でもうひとりが書記の藤井紗英先輩。

中井さんのお兄さんは会計だそうだ。

ところで伊藤先輩の機嫌の悪さがハンパない。ただ黙つてるだけなのに空気がピリピリして、三井先輩も藤井先輩もずっと睡れ物に触るように接している。

私のせい? なわけないよね初対面だもん。なんかものすつごいめんどくさいカンジ。

「中井先輩、伊藤先輩の思春期スイッチが押されていて怖いので帰つて良いですか?」

小さな声で言つたつもりだつたのに聞こえたらしい。それまでそっぽを向いていた伊藤先輩とバツチリ目が合つてしまつた。

やばい。

身の危険を感じたのでとりあえず何事もなかつたかのように笑つてごまかした後そのまま退室した。そして人生最速のダッシュで帰宅した。

きっと初めてあつた新入生のことなんて次回までには忘れてくれてると思います。

2. 蝶の夢

お昼休みは学校探検がてらあちこちでお弁当を食べる」としている。

学校通の中井友美ちゃんと案内役をしてもらつて、入学試験で仲良くなつた松村有里ちゃんと、同じ中学出身の山口美幸ちゃんとで食べています。

今日は体育館のステージの端っこ。

体育館は飲食禁止ですが、ステージ脇は人が来ない絶好の隠れ家だそうです。

校内放送もちゃんと流れています。

「…あ。蝶の夢だ！梶川愛、踊ります！」

スピーカーから流れてきたのは、最後のバレエコンクールで踊った曲だつた。

幼稚園から始めたモダンバレエは2年ちょっとと前まで私の生活のほとんどだつた。

8月のイベント公演、9月の発表会、10月の芸術祭、11月の海外公演、12月のクリスマス公演、1月には教室選考があつて、選ばれれば2月からのコンクールが全国までいけば3月末まで続くことになる。

お金がかかっていることは分かつていただけど、ひとりっ子だから丈夫なのかな？と深く考えたことはなかつた。

中1から中2に進級した春休み、お父さんに「話がある」と言われて初めて知つた。

私のバレエのせいだ家にはもうお金がなかつた。

「お前が本気でバレエを続けるつもりなら今後は借金でもなんでもして賄つてやる」そう言つてくれた。バレエ教室をかえても良い、宝塚音楽学校を受験したつて良い、でも学生らしい生活のない人生

を選ぶことに後悔がないかだけが気掛かりだ、よく考えなさい。

それまでは、このままバレエを続けながら高校に行って、卒業したらバレエ教室の推薦枠でロシアに留学して、帰ってきたらバレエ教室の先生になるもんだとばかり思っていた。

でもそれはそれでものすごく贅沢なことで、ちゃんととした考えもなしに選んで良いことではなかったことに、私はそのとき初めて気づいた。

よく考えて、高校生になることにした。

優秀な高校生になつて、学生らしい生活もバッチリ堪能して、できれば推薦入試で国立大学に入つて、奨学金で薬剤師とか安定感のある職につきたい。

お父さんお母さん見ていてください。愛は2人に後悔はさせませんよ。

バレエは大好き。

でも私にはもつと違う生き方もあるはずだ。

二一アップをふわりと決めたら足の甲が痛かった。

悲しいような、いつも清々しいような。

踊り終わつて、くるくるーとターンでみんなのところに戻ると、おや?人が増えている。

中井真先輩と伊藤和也先輩だ。
がーん。

…ぜつたいどつかでパンツ見えてるわー。

3. ミシンかたかたシュークリーム

1年生で創立会に入ったのは私だけ、人材育成枠なので実務ではなく雑用が主な仕事です。

今は5月に行われる運動会に向け、創立会のネーム入り腕章を製作中。

イマドキ女子は縫い物が苦手らしく、おかげで自宅から持ち込んだロックミシンとコンピュータミシンで基地をつくり大変居心地の良い空間のなかひとりで作業しております。

腕章なんて、バレエ時代に作られたブツに比べればギャザーもないし、スパンコールもないし、ちょろいモノですよ。おほほほほ。「」苦勞様。ゴメンね手伝えなくて。シュークリーム買ってきました。コーヒー入れるから休憩して?」

優しい三井先輩がさらさらの髪を揺らしながら甘やかしてくれたりもするし。

創立会サイコー!

高校生活サイコー!

高力ロリーサイコー!

コーヒーにも砂糖とミルクをたっぷり入れてあまあまにするのだ。うふふ。

目の前で中井先輩が「入れすぎ...」と呟くが伊藤先輩がどん引いて「...」が気にしない気にしない。

むしろ手をつけないならそのシュークリームも私にちょうだいちょうどいいなのだ。

二コ二コと笑顔をはりつけたまま、まずは中井先輩をロックオン。

「...欲しいの?」

うんうんうん。

じゃあ...、と中井先輩がお皿をこちらに差し出してくれようとしたとき、「待て」と伊藤先輩の声がした。

「俺のをやる」

なぜかどこかで思春期スイッチを押されたらしくめんじくさいカンジに機嫌が悪くなっている。

中井先輩しか見てなかつたので全然氣づかなかつたけど、何がスイツチだつたんだろ？

伊藤先輩の機嫌が悪いと室内の雰囲気が悪くなるので今後の対策のためにも何がスイッチか分かると良いんだけど？

でもせつかくなので気が変わらないうちにいただけるモノはいただこう。うふ。

中井先輩と伊藤先輩のシュークリームがのつた皿を左右の手にひとつずつ持つて「三井先輩、コーヒーおかわりくださいねっ？」と振り向くと、三井先輩がどこかでおもしろスイッチを押されたらしく、やたらとバカウケ中だつた。

4. 私たちは違う道を選んだ

美波ちゃんが訪ねてきた。

「愛ちゃん…」

私の顔を見たとたん泣き出した美波ちゃんを私は抱きしめた。

「大丈夫だよ。泣かないで」

美波ちゃんは私がバレエを辞めてから2年連続センターを踊つてい
る。今年のコンクールではソロパートも付いた。でも残念ながら結
果は期待されたほどではなかつたそうだ。

そのことで他の研究生にずいぶんつらくなられているらしい。

「もし連絡があつたら、できれば励ましてやつてほしいの」と美波
ちゃんのお母さんに電話で頼まれたのは、4円になつたばかりのこ
とだつた。

私がセンターだつたときにはむしろ美波ちゃんが私をイビり倒して
いた。

お嬢様育ちで悪気はないんだろうけど、それなりに悪意を感じる人
でした。

…。

もつ過去の話です。

それに高校生のいまセンターで踊るといつことは、バレエ教室のリ
ーダーであるということで、それは中学生の私がセンターだつた時
よりもはるかに重たい意味を持つている。

だから、お世話になつたバレエ教室の先生たちのためにも、私は彼
女を励まして前を向かせなくてはいけないと思つ。

「ねえ美波ちゃん、中1の時のコンクールで踊つた蝶の夢を覚えて

る? あれからもうずいぶんたつたよね。私はバレエを辞めて、美波ちゃんはずつとバレエを続けてきた。いまの私はもう一アップも上手くできないし、美しいポアントもできない。でも美波ちゃんは違うよね? いまの美波ちゃんがセンターなのは、努力を続けてきたからだよ。私がセンターだった時より、他の誰より、その場所が相応しいからだよ?」

美波ちゃんは、本当はいらない私と自分を比べて苦しんでいる。

バレエを辞めずにたゆまぬ努力を続けて高校1年生になつた梶川愛。

そんな人はどこにもいない。

そのことを、ちゃんと理解しないといけない。

美波ちゃんも私も。

私たちは、違う道を選んだんだ。

5. 伊藤先輩は基本良い先輩です

「運動会の前に新入生テストがあるからゴールデンウイークに私の家でお泊り勉強会しない？」と友美ちゃんが誘ってくれた。
お泊り会！行く行く！
すつごい楽しみー。

「なんか良いことでもあったのか？」

めずらしく機嫌の良い伊藤先輩に聞かれた。

伊藤先輩は気がつくと突然不機嫌になつてたりして時々すゞーくめんどくさいカンジになるけど、基本優しくて良い先輩だということがだんだん分かつてきました。

自分は食べないのにカワイイ後輩のために毎日おやつを持つてきてくれたりします。

…いや、別に餌付けされてないですよ。

「えへへー、ゴールデンウイークに友美ちゃんたちとお泊り会なんですよ。友達のお家にお泊りなんて初めてなのですっごいすつごい楽しみなんです」

そうか、良かつたな。と微笑む伊藤先輩の後ろで、なぜか慌てた様子の中井先輩が唇に指で作ったバツ印をあてている。
はて？

それで誰の家に泊めてもらうんだ？と続ける伊藤先輩に「中井家です」と答えると、なぜか物凄い速さで扉まで移動した中井先輩を伊藤先輩がじっと見つめた。

「…ただの勉強会だよ」

「…」

「別にワザと黙つてたわけではないし

「…」

「…」

「…」

「…お前も泊まりに来る？」

「考えておひつ」

なんかいま緊迫してたなー、と思いながら伊藤先輩が剥いてくれた一口サイズのチョコレートをもつひとつ食べた。

6. 初恋のお話

お泊り会初日。

伊藤先輩も中井先輩の部屋にお泊りにきていた。
友美ちゃんの部屋には私たちがいるから、本日の中井家にはお父さんお母さんに高校生の子供が6人。

「順番にお風呂入つてたら夜中になるからあんたたち錢湯行きなさいねー」と言われて晩御飯の後にみんなで近くの錢湯に行くことになりました。

「私ホテルの大浴場とかは入つたことがあるけど、おサイフ持つて錢湯行くつて初めてだ」とカミングアウトしたら、「愛ちゃんつてもしかしてすごいお嬢様なの?」ってみんなに聞かれた。

「そんなことないよ。バレエやつてる子の中にはすごいお嬢様もいっぴいたけど、うちは庶民なので危うくバレエで破産するところでした」

「えー！バレエってやつぱりそんなにお金かかるお稽古事なんだ」「最初はレッスン費と発表会の参加費くらいなんだけど、そのうち海外公演とかに参加するようになつたらドーンとな……そういう海外公演つていえば今でも忘れられない初恋の話があるんだけど聞く？」

それは私が小学6年生で海外公演に4回目の参加をした時のこと。ステージを終えてみんなで着替えていたところに男性がやってきて、ほぼ真っ裸の私に「エクセレントなんとかかんとか」と言いながらキスをした。

ちなみに私にとつてはファーストキス。

その人は小さな顔と長い手足を持つた細マッチョイケメンで、世界的にも期待されている若手天才バレエダンサーだったから、みんなは私のことをラッキーだって羨ましがつてた。

だつてものすゞぐ高く跳んでおまけに止まつてゐみたいに見える人だつたのよ。

私もぱーつてなつて、これが恋なのね…、とか思いながら着替えて廊下にてたら、その人がムキムキマツチヨな彼氏とすつごい濃厚なちゅーをしている真つ最中で。

「初恋はおよそ5分で終了しちゃつた」

この話、バレエダンサーにとつてはなんのことないバレエあるあるだけど、バレエと関係ない人にとっては突つ込みどころ満載の衝撃的な話みたいで、いつ話してもウケが良いんだよねー。

今回もウケた。

特に伊藤先輩の反応は激しかつた。

お楽しみいただけたようでもうかつたです。

7. 女子会議

お風呂でムネおつきいねーとか口にチエックを入れつつ楽しく過ぎ
「」じていたら、友美ちゃんに「愛ちゃん彼氏はいる?」と聞かれた。

「いなー。でも彼氏ほしーなあ。美幸ちゃんはいまでも秋本くん
と付き合つてるの?」

「えつー! 美幸ちゃん彼氏いるの?」

「中学のとき付き合つてたよね?」

「愛ちゃんなんでそんなこと知つてるの…。いやあつ、まだ別れて
はないよ、たぶん。でも学校が離れちゃつたし、これからどうなる
かワカランナイ…」

「そつかあ、さびしいねー」

「なんかオトナ。友美ちゃんは彼氏いるの?」

「いない。いたことはあるけど別れた。有里ちゃんは?」

「彼氏なんていふこともなによー」

「そつかあ。有里ちゃんは私と一緒にだ。はやく彼氏ほしーねー」

「…伊藤先輩とかじつ思つ?」

「えつ? 友美ちゃん伊藤先輩が好きなの?」

「違う! 私じゃなくて!」

「あのね愛ちゃん、友美ちゃんは伊藤先輩が愛ちゃんのこと好きつ
ぽいつて言つてるんだよ

「ええつ? そつなの?」

「やつぱり美幸ちゃんもそつ思つた?」

「うん。でも愛ちゃんはぜつたい気がつかないだろつかり思つとく
つもりでした」

気づかんかった。

でもこれは…。

「彼氏ゲットのチャンス…」

「いや待て愛ちゃんはやあるな」

「そりだよ。もひりょつとちやんと考へないと」

「そもそも愛ちゃんは伊藤先輩のことどひり思つてゐるの?」

「先輩のこと…?」

いち。先輩は時々めんどくせこ。

に。先輩はたくさんおやつをくれる。

「たまに機嫌悪いとめんどくさいけど、良い彼氏にならう

…いえ、別に餌付けされてしませんよ。

「愛ちゃんは明らかに恋愛感情とは違つ基準で言つてゐるよつた気がするんだけど?」

「まあ、人それぞれの基準があるから一概に否定はしないけど…」

「とにかくはやまらない。伊藤先輩の気持ちだつてまだ本当のところは分からぬんだし」

そうか。

まだ分からぬのか。

めぐるめぐ男女交際の世界がひろがるのかと期待したのに。

…ちつ。

「…愛ちゃんが舌打ちした」

「黒桜川愛だ」

「思いのほか腹黒いね」

失礼な。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8198y/>

思春期スイッチ。

2011年11月30日09時45分発行